

1. 公開講座・公開授業の実施状況について ～全国国立大学生涯学習系センター研究協議会加盟校の動向～

【表1. 公開講座数】

0～19 (講座)	10(大学)
20～39	10
40～59	3
60～79	2
80～99	1
100～119	0
120～139	1

【表2. 公開授業数】

1～29 (科目)	5(大学)
30～59	4
60～99	3
100～149	3
150～199	2
200～299	1
300～399	0
400～499	1
無回答	4

全国国立大学生涯学習系センター研究協議会が発足して30年目にあたる昨年、加盟27校の公開講座および公開授業の実施状況について、昨年度当番校の大阪教育大学が調査を行いました。その結果の一部を紹介します。他大学の動向を踏まえた上で、本学における今後の方向性を考える一助として頂きたいと思います。(なお、データはいずれも平成20年度です。)

表1は子どもや社会人を対象として開講する「公開講座」の実施状況です。平均講座数は約33講座となっています。(最小数は8講座、最大数は133講座。)本学は毎年35講座前後を開講しています。大学の規模が様々なので単純に比較することは難しいのですが、多からず少なからず、平均的な開講状況と言えそうです。

表2は正規の学生を対象として通常実施している授業を公開する「公開授業」の実施状況です。公開授業に関しては、加盟27校中23校が実施、4校が未実施であり、表は実施校のみの状況です。本学の20年度の公開授業は15科目でしたので、実施校の中では少ない方に位置します。そもそも正規の学生を対象に行う授業を公開するにあたっては、様々な課題が想定されます。一方で、公開講座から公開授業にシフトする大学も見られるなど、公開授業は大学開放の方法の一つとして模索されています。

2. 日本初の大学公開講座～センター担当教員の研究・実践紹介(8)～

前号では、香川大学公開講座の起源が大正時代に設立された高松高等商業学校(経済学部の前身)にあることをご紹介しました。では、そもそも日本の大学がはじめて公開講座を行ったのはいつ頃のことでしょうか。

この問いに答えるのは少々やっかいです。まずは「大学公開講座」をどのように定義するか、そこから始めなければなりません。本欄ではとりあえず「大学公開講座」を、①大学(前身校を含む)において組織的に行われたこと、②ある程度継続されたこと、③公衆を対象にしたこと、とします。その条件に合致する最も初期の事例は、明治17(1884)年から実施された東京大学の“理医学講談会”ではないかと思われます。(ただし、私立大学については調査不十分のため、国公立大学に限ります。)

理医学講談会規則(全十条)の第二条は次のような条文となっています。

第二條 本會ノ主旨ハ理學醫學諸科ニ關スル事項ヲ平易ニ講談演説シ以テ公衆ヲシテ學術上ノ知識ヲ發達セシムルニ在リ

聴講は無料。初年度には合計9回開催され、毎回おそよ800人ほどの聴衆が駆けつけたとのこと。

これら講談会の筆記録は『東洋学芸雑誌』(イギリスの科学雑誌*Nature*を範として創刊された総合学術



誌)に随時掲載され、会場に行くことが叶わなかった人にもその内容が伝えられました。筆記録の中には「聴衆拍手喝采」「聴衆大に笑ふ」という但し書きが入っているものも見られ、大いに盛り上がっていた様子も伺えます。

理医学講談会は、その後明治20(1887)年に大学通俗講談会としてリニューアルされ、理科、医科のみならず、法科、文科、工科の教授の協力も得て、全学的に実施されるものとなりました。

ところで、ここで質問です。明治17年5月17日の“日本初の大学公開講座”のテーマは何だったでしょう？

講談会は二本立てで、一つは山川健次郎^{※1}「電信機ノ説」でした。日本の近代化を語るにあたり、欠かせないテーマの一つですね。では、もう一つは？

答えは……大澤謙二^{※2}「河豚毒ノ説」です！

残念ながらこの日の筆記録は『東洋学芸雑誌』には掲載されておらず、その具体的な話の内容までは分かりませんが、同誌は「極面白キコトナリ」と報じています。フグの毒に関して、どのような面白い話が展開されたのでしょうか？

※1 山川健次郎は物理学者、のちに東京帝大総長、九州帝大総長、京都帝大総長を歴任。

※2 大澤謙二は生理学者、日本の医学博士第一号。

文責:山本珠美(准教授)

3. 夏休み子ども向け公開講座がはじまります！ ～英国ランカスター大学の生涯学習への取組(2)～

香川大学は数年前から夏休みの子ども向け公開講座を拡充しています。幸い、ニーズの高さに支えられて、ほとんどの講座が募集定員を超える申し込みをいただいています。自分への投資をためらう親御さんも、わが子となると別のようです。大学のもつ専門性に裏付けられた「本物」に触れさせようと、親御さんが子どもを説得して参加させているということも漏れ聞こえてきます。

さて、英国ではちょっと事情は異なりますが、子どものための講座も準備されています。毎日大学へ通うスタイルもありますが、大学の学生寮に親子で宿泊して別々の講座に参加するスタイルにも人気があるようです。親子の触れ合いはもとより、避暑と学習の両方を満喫できる英国の講座への参加は知人ぞ知る英国大学の活用術なのです。そういえば、私が滞在していた10年前には、父親の研究のためにランカスター大学に来ていたクウェート人の母親と子どもが講座を受講していたことを思い出します。

子どもの受講する講座のいくつかを紹介すると、大学のスポーツセンターで多様なスポーツを経験できる講座、芸術や音楽、ドラマなどを体験するワークショップ、いろいろな素材や器具を使って行われるサイエンス教室、大学近郊の自然と向き合う探検教室(水辺の生物観察、滝巡り、農場訪問、ロッククライミング等)などがあげられます。日本の講座と比べて、大学周辺の自然環境を利用した体験学習が多くなっています。

大学が行う子ども向けの生涯学習事業はマージナルなものにとらえられがちですが、未来の学生、もっと先の成人受講生、と考えると、戦略的にももっと重視すべき分野なのかも知れません。【写真：H20年度「研究はじめての第一歩」】

文責:清國祐二(センター長・教授)



センター雑感

元ラグビー日本代表の大八木淳史さんとKSB放送の多賀公人さん、ふたりの客員教授とコラボレーションした「自己開発へのチャレンジ」(教養科目特別主題)が終わろうとしています。大学の授業らしくない授業でしたが、学生にとってはとてもチャレンジングで、またとない経験ができました。私としては通常の授業より大変でしたが、ちょっとした満足感と達成感に浸っているところです。次は何にチャレンジしようか…(清國)

バックナンバーは下記のWebサイトに掲載されています。是非ご覧下さい。

Tel. 087-832-1273 Fax. 087-832-1275 URL. <http://www.kagawa-u.ac.jp/lifelong/> Email. syogse@ao.kagawa-u.ac.jp